

予備研究報告（2025 年度）

長崎華僑の近現代

篠崎 美生子（コーディネーター、PRIME 所員、教養教育センター）

朱海燕（本学非常勤講師）

研究の目的

長崎は、江戸時代に唯一中国に貿易の門戸を開いていた町である。幕末の開港以降も多くの中国人が貿易、商業のために訪れて定住し、江戸時代に新地蔵と唐人屋敷があった一帯（長崎市新地町、および館内町）に集住した。福建省にルーツを持つ人がほとんどを占めるそのコミュニティは極めて強固で、日中戦争時にも帰国せず数百名（長崎県全体では 1000 人近く）がとどまっていたという。

しかし、盧溝橋事件後に長崎華僑に多数の逮捕者が出た国民党事件（1937 年）ほか、戦時下の華僑の被害について、具体的な記述は皆無に近い。とくに華僑の原爆被害については佐多稲子の小説「樹影」（1972）以外には活字資料が見つからないほどである。

そこで本研究では、長崎華僑が近代以降、とくに日中戦争・アジア太平洋戦争期にどのような苦難を乗り越えてきたのか、できるだけ具体的な資料や証言を見つけることを試みた。

なお、「華僑」とは近代以降、中国の国籍を保持したまま海外に住む人を指すが、本学教養教育センター附属研究所 2023-24 年度プロジェクト「長崎華僑の近現代―排除と融和をめぐる―」主催、国際平和研究所共催で行われたシンポジウム「長崎華僑の歴史と展望」（2023 年 12 月 23 日横浜校地にて）の陳東華氏基調講演「長崎華僑の歴史と展望―泰益号陳氏の歴史を中心に―」により、「唐人」（江戸時代までに貿易等のため来日した中国人）の足跡が華僑のアイデンティティと密接な関連を持つ場合があることも知った。江戸時代に唐人によって建立されたいわゆる「唐寺」が、現在も華僑・華人によって運営、維持されていることはそのよい例である。そのため本予備研究では、華僑と唐人との関係にも注意を払うことにした。

また、日本国籍を取得したことで正式には「華人」と称すべき人もいるが、その方々も含めて「華僑」とみなし、調査を進めた。

研究成果

(1) 老華僑への調査

今年度は、戦前に福建から長崎に渡来した方の子孫であるいわゆる「老華僑」6名に取材することができた。日中戦争／アジア太平洋戦争下での華僑の被害や苦勞については、なかなか積極的に語ってくださる方が少なかったが、中には、以下のような貴重な証言を寄せてくださる方もいた。

福建出身の両親を持つ2代目華僑のZ氏。1945年8月9日、疎開先の本原町（長崎市北部、爆心地から1km程度か）の家で被爆。そのとき0歳。結婚と同時に来日してまだ日の浅かった若い母は、ガラスの破片から氏をかばい、靴が溶けて歩けないために日本の下駄をはじめて履き、氏を背負って長崎南部に逃げたという。新地町は長崎南部中心部近くにあるが、空襲を避けるために南部から北部に疎開してかえって爆心地に近くなったケースは、日本人家庭にもみられるものである。なお、氏の父はスパイの咎で拷問を受け、片耳が不自由になっていたという。

このほか今回の取材により、終戦を佐世保や大村などで迎えた華僑もいることがわかり、「原爆」だけに焦点を当てていては、戦時下の華僑の苦難をよく知ることができないことも理解できた。

なお、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館におさめられた被爆体験記（いわゆる「黒本」）にも、新地町、館内町で被爆を体験した華僑の記録のほか、それ以外で被爆した華僑らしき方の記録がわずかながら残っている。1970年代に録音されたとみられる伊藤明彦による音声データ（日本語話者）も1点発見できた。

そうしたものの中には、「戦時下」だけでなくその後の原爆に由来する健康被害や貧困に関する記録も見られた。今後、華僑の苦難を総合的に記述するための貴重な資料として扱いたいと考えている。

(2) 現存する風俗についての調査

・1600年代に福州地方の「唐人」らによって創建され、現在も華僑によって維持されている崇福寺（長崎市鍛冶屋町）の盂蘭盆会、興福寺（長崎市寺町）の節分会を見学し、どのような独特の祭事が維持されているかを調査した。また、崇福寺の複数の理事から、祭事の運営や、「国宝」の維持管理に伴う困難についても教示を得た。

・2025 年で「鎮座 400 年」とされる長崎諏訪神社の大祭「おくんち」を見学し、奉納踊等への中国文化の影響を調査した。具体的には、諏訪町の「蛇踊」と龍舞の酷似および清朝～民国期衣装の着用と長喇叭・胡弓の使用、新橋町「阿蘭陀漫才」等での胡弓の使用、踊町の顔役男性が着用する「唐人パッチ」等に、中国文化がよく表れていることが確認できた。なお、以前は「蛇踊」の衣装や「唐人パッチ」の製作を新地町に住む華僑の女性に依頼していたとの話も聞いたが、確認は取れていない。

(3) 「唐人」についての調査

・平戸市松浦史料博物館および平戸オランダ商館を見学、長崎に貿易の拠点が移る前に平戸を拠点に行われていた「御朱印貿易」の状況や、平戸生まれで明末の軍人として活躍した鄭成功の書（拓本）を確認したほか、明代の貿易商人で平戸にも居住した王直の史跡を見学した。

また、長崎老華僑で華僑史研究者でもある陳東華氏により、「唐人」が「帰化」の際に新しく採用した姓に中国の故地の名を反映させた例も多く（陳氏→「潁川」氏等）、そのルーツをたどることが可能である旨の教示を得た。

(4) その他の調査

・長崎原爆資料館所蔵の山田栄二「水彩画 長崎市の惨状」（1945 年 8 月 10 日）のうち、浦上駅前のスケッチに「この四人の女は中国人と思えた。」とのキャプションが 1960 年代になってからつけられていることが分かった。ただし、この女性たちのうちひとり、三菱重工業長崎兵器製作所（茂里町工場）で働いていた日本人職員であるとの証言があるとのことで、この先の調査は難航している。

・1972 年の日中国交回復が長崎の華僑社会にも大きな影響を与えたことを示す資料について、かつての時中小学校（華僑向け小学校）の関係者に閲覧を許可された。次年度にぜひ調査を進めたい。

2026 年度の本研究において

長崎華僑の近現代とは、「落葉帰根」（滞在先で実りを得たのち老後は故国に戻る）を理想の生き方としてきた彼らが、「落地生根」（異国に根をおろして子々孫々の繁栄

をみる）へと転換していった時代であるとも言える。これが、15年にわたる戦争によって故地との行き来を絶たれた結果であることはたしかだが、見方を変えれば、華僑が長崎市民として深く根を下ろしていく過程であったということもできるだろう。ゆえに、華僑史を紡ぐことは、彼らと不可分な関係を築いてきた長崎市民社会の歴史をあぶり出すことでもあり、ひいては日本社会のありようを明らかにすることにもつながるはずである。

よって、2026年度からはさらに多くのメンバーとともに本研究に取り組み、長崎華僑の近現代史をより総合的、立体的に明らかにしていくつもりである。

【参考文献】

- ・曾士才／王維編著『日本華僑社会の歴史と文化』（明石書店、2020）
- ・陳優継著『ちゃんぽんと長崎華僑』（長崎新聞社、2009）ほか

【成果発表】

- ・篠崎美生子 卓話「終わらない被爆—長崎の町と人—」（横浜ワイズメンズクラブ、2026.3.12）